

平成 29 年度甲子園研修報告書

須坂東高校 高坂 亨

8月10日から12日までの3日間、甲子園指導者研修に参加させていただきました。高校時代、選抜大会を観に行ったことはあったが、今回は指導者として、高野連にかかわる者としての視点で観戦し、新たな発見、感じたこと、学んだことが多く、非常に有意義な研修になりました。

1、試合観戦

- 8月10日(木) 第3試合 聖光学院 6-0 おかやま山陽
第4試合 聖心ウルスラ 5-2 早稲田佐賀
- 8月11日(金) 第1試合 広陵 10-6 中京大中京
第2試合 横浜 4-6 秀学館
第3試合 興南 6-9 智弁和歌山
第4試合 大阪桐蔭 8-1 米子松蔭
- 8月12日(土) 第1試合 滝川西 3-15 仙台育英
第2試合 日本文理 9-5 鳴門渦潮

上記の試合を観戦し、また他の先生方と情報交換する中で、感じたこと・考えたことをテーマごとに報告していきます。

○試合開始前、試合の間

歴代の先生方の報告を見させてもらい、研修に臨んだ。その中で、スピードが違うなどの声が印象に残り、どれほどのものなのかと思い甲子園に行きました。実際は、想像を超えていました。まず試合の間の時間がとても短く感じました。それは、1日に4試合を消化しなければならないという過酷な日程にあるからです。さらにテレビ放送の関係もあると感じました。試合の間の時間をどのようにして短くしているかと言うと、各チームのアップでのキャッチボールで遠投、トスバッティングなどの時間をとらないからです。さらに整備とシートロックが同時進行で行われていました。そのようなことなどで時間を大幅に短縮できていました。さらに試合終了後のベンチの入れ替えもとてもスムーズに行われており、5分程度でベンチの入れ替えが終わっていました。また、一試合の時間を短縮することでも熱中症の対策にもつながるとこの研修で感じました。



幅に短縮できていました。さらに試合終了後のベンチの入れ替えもとてもスムーズに行われており、5分程度でベンチの入れ替えが終わっていました。また、一試合の時間を短縮することでも熱中症の対策にもつながるとこの研修で感じました。

○試合の様子

試合中は、どのチームも大きな声を出し、味方を鼓舞したりしていました。さらにベンチワークが素晴らしかったです。試合に出て

いても、いなくてもチーム全員で戦っていることが印象に残りました。審判の声もよく通り、攻守の入れ替えの時には、選手によく声をかけ、きびきびとした行動をさせていました。試合中出場している選手で、体格について言えば、どのチームの選手もバットが振れて、走れる、というような体格の選手が多かったです。実際に足も速く、バットも振れ、肩も強いと感じました。さらに能力が高いのでボテボテのあたりでも、ゲッツーがとれていました。打つだけ、走るだけ、といった選手は少なくなって総合能力での起用が多くなってきていると感じました。長野県の選手と比べると、やはり長野県の選手は線が細く感じました。夏の暑い中全力のプレーを続けるためにも体作りというのは大切になってくると思いました。さらに体ができてくれば、一つ一つのプレーの質も向上されると考えます。

甲子園の雰囲気は独特だと私も聞いたことがありました。実際に行ってみると、県大会の予選会とは全く違う雰囲気でした。まずお客さんの量が違うということは、声援の量も違うということです。エラーなどのミスをしたときの観客からのため息の大きさが違いました。このため息を聞いて平然とするのは難しいと感じました。さらに人気のある高校には、ホームグラウンドのような声援がかけられます。横浜高校はとても人気で、試合の終盤負けていても、会場がいい雰囲気を作るので逆転できそうな雰囲気ができていました。やはり会場の雰囲気というのは、どこでも大切ということがわかりました。

・攻撃

どのチームもファーストストライクを積極的に振りにきているように感じました。特に熊本県代表の秀学館高校は横浜高校相手に試合開始2球で先制点をとったのは圧巻でした。さらに甘い球を見逃すことがほとんどなかったです。長野県の予選を観ていると、ファーストストライクや甘い球をよく見逃して、投手を助けている場面が目立ちます。自分が教えている今のチームもそのような場面が多いです。まずはファーストストライクを思いっきり振れるようにこれから指導していきたいです。そして走塁のレベルも高かったです。ヒット一本でホームに生還する確率が高いと感じました。それは打球の判断がよく、一歩目がきれて、サードベースの周り方がいいと考えます。すべてを一度に身につけることは難しいが、一つずつ指導して、今のチームにもその技能を少しでも身につけられるように指導したいです。

・守備

基本的にどの動作も素早いと感じました。例えば聖光学院のショートの瀬川選手は強い当たりでも体で止めた後、ボールを拾って投げるまでが早かったです。他のチームの内野手もボール見て捕球しているので落とした後のボールを見失うということが少ないと感じました。そしてどのチームも送球ミスが少ないです。基本的なキャッチボールを徹底し、レベルの向上につなげていると感じました。野球の基本であるキャッチボールを自分のチームでもいい加減にやらせず、徹底してやることでけがの予防にもつながると考えます。さらにキャッチボールの時間が短くても肩を温めることができるように練習でも意識させ

ていきたいです。

○最後に

今回の甲子園研修に参加させていただき本当にありがとうございました。今回の研修と一緒に参加させていただいた、大野田先生、清水先生、松本先生、引率してくださった巢山先生、山岡先生、この方々と多くの情報交換をさせていただき、試合観戦をさせていただいて、書き切れないほど勉強になりました。今後、この貴重な研修の経験を指導に活かし、長野県の高校野球に微力ではありますが力になるよう全力を尽くしていきたいと思えます。このような貴重な研修機会をくださった長野県高校野球連盟、また北信の先生方に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

2017年度甲子園指導者研修報告書

野沢南高等学校
松本 豊明

【初めに】

今回、甲子園指導者研修に参加する機会をいただき、8月10日～12日の3日間、第99回全国高等学校野球選手権大会を見学してきた。

大雨の影響で開会式など初日が順延となったことで、研修は大会3日目からスタートとなった。今回の研修では、以下の試合を観戦させて頂いた。



大会3日目（研修一日目）

第3試合：聖光学院（福島）— おかやま山陽（岡山） / 第4試合 聖心ウルスラ（宮崎）— 早稲田佐賀（佐賀）

大会4日目（研修二日目）

第1試合：広陵（広島）— 中京大中京（愛知） / 第2試合：秀学館（熊本）— 横浜（神奈川）

第3試合：智辨和歌山（和歌山）— 興南（沖縄） / 第4試合：大阪桐蔭（大阪）— 米子松蔭（鳥取）

大会4日目（研修三日目）

第1試合：仙台育英（宮城）— 滝川西（北海道）

以上の試合を観戦して感じたことをレポートする。



【試合観戦】

○甲子園の雰囲気

研修2日目は、4試合全てが好カードであったこともあり、早朝から甲子園は満員であった。（朝6時半の段階で阪神・梅田駅では甲子園への入場が困難であるとのアナウンスが流れていた）甲子園では、普通のヒットでも大きな歓声がわく。エラーでもため息のような歓声が響く。この雰囲気は、プレーしている選手に大きな影響を与えるものだと思う。このような雰囲気の中で重要になるのは、「いかに普段通りの自分たちの野球ができるか」だと思う。智辨和歌山の2アウト2塁からの3連続四球、その後の3連打も、甲子園の雰囲気、観客の雰囲気にもまれてしまった結果ではないかと思う。

逆に、研修3日目の仙台育英の守りにおいても、観客の「滝川西への得点の期待」する応援により、7回の3点は入ったようにも思う。場所や対戦相手、観客の多さに関係なく、普段通りの野球をすることが甲子園では勝敗をわけるのではないかと感じた。

○投手

7試合観戦して、良い投手に共通することは、やはり「コントロール」と「変化球」であった。大阪桐蔭の徳山選手や秀学館の川端選手が140キロを超える速球を投げていて、それも魅力ではあったが、2人ともコントロールも良い。また印象として残っているのは、高いレベルの左ピッチャーを多く見られたことであ

る。高校生では、右バッターでも左ピッチャーに対して苦手意識を持っている選手もかなりいるように思う。変化球をひっかけてしまうこと、ストレート、スライダーやシュート回転のボールなど、左ピッチャーの球筋のイメージが少ないことが考えられるので、より多くの左投手との対戦の経験や、そうした球筋への対応を練習の中から行うことが必要であるとも感じた。

○打者

各チーム、打者はまずバットをしっかりと振り切っている印象だった。決して大振りという訳ではないが、当てに行くようなスイングではなく、しっかりと振り切る。なので、多少詰まっても内野の間を抜けていったりするのだと感じた。また、130 キロ中盤のストレートでも、甘い高さにすれば簡単に打ち返していた。

長打も多く見られたが、各校ともバントの精度も高かった。まずは130 キロ以上のボールにも振り負けないように、しっかりとバットを振り切る力と、バントなど走者を進める方法を徹底することが必要だと感じた。

○走者

どのチームの走者も積極的に先の塁を狙っている。投手のクイックが早く、捕手の送球が早くても盗塁を仕掛けるし、シングルヒットの打球にも2塁を陥れるシーンも見ることができた。僅かなスキも見逃さず貪欲に走る姿が印象的であった。日頃の練習から感性を磨き、総力アップに力を注いでいるからこそと考えた。

【甲子園の施設見学】

大会本部にご勤務されている小林善一先生に球場内の施設を案内していただき、室内練習場など入れていただいた。室内練習場とベンチ内には水やスポーツドリンクが用意しており、大会を支えて下さる方々が、選手が万全の状態で行えるように工夫して下さっていることがよくわかった。

また、よくテレビで見る監督と選手がインタビューを受けるスペースも見学することができた。そこには、取材時間が細かく決められており、長引いて選手に影響が出ないような配慮がされていた。

さらに、試合終了後は両校に対して複数の理学療法士の方々がクーリングダウンを指示する場面も見学させていただいた。智辨和歌山ー興南の試合後であったが、試合の熱気冷めやらぬ状況の中、ここでも選手の身体に配慮している場面を見ることができた。

途中、甲子園の土が保管されている場所や、雨天時に投入される砂や内野を覆うシートなど球場の甲子園の裏側を余すことなく見学させていただいた。

以上のように、甲子園大会では常に選手の事を考えて様々な配慮がされており、大会役員、各都道府県の役員、審判、報道関係者など多くの方が関わることで大会が運営されていることを改めて感じた。

※少し自由な時間をいただいたので、「甲子園歴史館」の見学に行った。甲子園の歴史を物語るボールやユニフォームがところ狭しと展示がされていたり、トリックアートやドラフト体験など老若男女誰もが楽しむ事ができる施設であった。生徒引率などで甲子園見学をすることはあっても中々踏み入れない場所であったが、これを機に見学することが出来たことは大変有意義であった。



【グラウンド整備】

阪神園芸によるグラウンド整備はいつ見ても素晴らしいと感じる。全ての選手が自分の持てる力を出し切る舞台を整えているわけだが、そこには様々な工夫と想いが込められていることが伝わってくる。トンボも全て手作りしており、地面へのあたりが悪くなると鉋で削って調整をするそうである。マウンドやバッターボックスも30分後の試合開始に間に合うよう瞬時に整える技術は圧巻である。ラインを引く技術も高い。2輪のラインカーを操り、素早く真っ直ぐ引くという当たり前のことのようにだが、やはり日々の訓練や経験に裏付けされた高い技術をであると驚嘆した。ここには書ききれないほどの裏方の方々の道具を揃えたり、整備への工夫などの経験や準備に対する熱意には本当に頭が下がる。自チームの選手にもう一度グラウンド整備を見直すきっかけとしたいと強く感じた。



散水も、「雨が降ったように撒く」ことを理想としているそうだが、簡単なようでとても難しく奥が深いと感じた。これも自チームの選手と共に研究してみたいと思う。

【全体を通しての感想】

どのチームの選手も、体の強さと動きのスピード感があった。甲子園では試合間隔も短く、攻守交代などでもはやい試合展開が求められる。また、球場は気温も高く熱気に包まれている。その中でプレーするのであれば、暑さに負けない体の強さとスピード感が不可欠であると感じた。

練習の段階から、体の強さ・体力をしっかりとつけ、なおかつスピーディーに行動することが必要であると思う。

グラウンドや道具(野球以外のモノを含め)を大切に扱い、きちんと整備・管理することなどを改めて学ぶ事が出来た良い研修をさせていただいた。

【まとめ】

今回の研修を通して、「甲子園まで辿り着くために求められること」の一端がわかった気がした。と同時に、辿り着くまでの難しさも感じる事ができた。3日間の日程ではあったが、非常に参考になる研修とすることができた。

今回、このような研修の機会を設定していただいた長野県高校野球連盟の方々をはじめとし、3日間お世話になった巢山先生、山岡先生、同じ研修に参加された県内各校の3名の先生方に感謝します。ありがとうございました。



平成 29 年度甲子園指導者研修報告

伊那弥生ヶ丘高校 清水猛杉

1. はじめに

甲子園を見るのは、中学生の時の選抜大会以来でした。このとき初めて高校野球を目の当たりにして、甲子園で野球がやりたいという大きな希望を抱きました。しかし、高校生になりテレビで見る甲子園と自分の野球とに大きなギャップを感じ、正直なところ私の中では甲子園で行われている野球は全く別次元のもののように感じていました。今回このような機会をいただき、自分の中の未熟な高校野球を少しでも高めるべく、甲子園研修に参加させていただきました。8/10～/12 の 3 日間選手権大会を観戦し、また出場選手の動線等の説明もいただきましたので、ここに報告いたします。

2. 投手力について

大会第 3 日の第三試合、聖光学院対おかやま山陽の試合中に甲子園に到着し、最初に見たのが聖光学院の斎藤郁也くんでした。最速 140km/h、平均でも 135km/h を超えるストレートに、ストレートと同じように大きく全力で振った腕から抜群にキレのあるスライダーやチェンジアップ、90km/h 台のカーブを投げ、この試合被安打 5 の 12 奪三振で完封と驚嘆させられました。その後 3 日間ともに、出てくる投手の多くが 140km/h あたりのストレートにキレのある変化球を投じていて、全体を通して見た正直な感想としては、「全国大会ともなると、とんでもない投手ばかりだ。果たしてどれほどの練習を積めば、よくいる高校 1 年生が 2 年間でこのように成長できるのだろうか。正直、最終的には才能の差なのでは無いか。」とさえ感じるものでした。しかしながら、3 日間の研修の中で見た多くの投手のなかから、いわゆる“普通の高校生”でも参考にできると感じた投手が 2 人います。1 人目は智弁和歌山の北くん、3 者連続四球から 4 失点し 2 回途中で降板したものの 125km/h のストレート、スライダー、90km/h 台のカーブを丁寧に内外に投げ分け、甲子園常連の智弁和歌山で初戦の先発としてマウンドに立っていました。2 人目は広陵の山本くん、中京大中京戦では、120km/h 台後半のストレートとスライダーを審判のストライクゾーンに合わせてコーナーにきっちり投じることで中京大中京打線を自責点 1 で抑えるという好投を見せていました。なかなか練習を積んでいても球速が 140km/h を超えるというのは難しく、持って生まれた体格や才能も少なからず必要な領域に入るのかと思います。その中で、この二人のように(山本くんは最速 139km/h 出るようですが…)球速は無くとも、コーナーワークと低めに丁寧にコントロールされた変化球を組み合わせることで、甲子園でも通用するという事は非常に参考になるものでした。ただし、2 人とも左投手であり、やはり左投げということで有利に働いている面もあるのかという印象もあります。右投手が球速は無くともコーナーワークと低めの変化球等を駆使することで通用するのかしないのか、通用させるためにはどのようにしたらいいのかという部分は、今後の課題として勉強していこうと思います。

3. 攻撃力について

まず前述のように、どのチームの投手も直球は 140km/h を超え、キレのいい変化球を数種類投じる中であっても、決して振りまけること無く 1 番～9 番までの出場全選手が長打を打てる力を持っていることに驚きました。観戦した試合の中で、選手の多くに共通することが、手首の返し方が非常にうまいこと、外角に対しては対軸を傾けながら逆方向へ強く打てること、緩い変化球に対してはストレート待ちであろうと思われる状況であっても体が前に出ること無く軸を保ったまま強く振ることができていました。これによって、1 打席の中で 1 球あるかないか程度の確率の少ない甘く入った投球を、直球だろうと変化球だろうと確実に強い打球で打ち返すことができているのだと思われます。

また、共通して見てとれたのはボールの見逃し方でした。顔でボールを追うようなことはせずに目だけで追っているのか、あるいは、ある程度手元の部分に関しては予測で判断しているのかは分かりませんが、顔が投手の方向を向いたまま頭の位置が動くことなく見逃していました。これは、プロ野球や MLB でも見られることですが、球速が速いために顔で追うと間に合わないということが理由かと思います。打撃指導の中で、「ボールをよく見て打て」という場面は多くみられるかと思いますが、果たしてどこまで“よく見て”打つのが良いのかなど、まだまだ勉強の余地が残るものでした。

4. 選手の動線について

研修 2 日目の第四試合の試合中の時間に、大変お忙しい中にも関わらず本部役員としてチームの先導や指導等されている小林善一先生にベンチ裏や選手の入り口、クーリングダウン等ご説明いただきました。

まず、試合開始予定時刻の 2 時間前より取材の時間が設けられており、この時から取材に慣れていない選手にとっては相当なプレッシャーに襲われ、特にうまく受け答えができない場合には、試合へ向けた精神状態としては非常に良くないことがうかがえます。また、取材後から前の試合終了までは、阪神球団が使用しているブルペンを利用してアップをするのですが、走るスペースもほとんどなくキャッチボールに至ってはせいぜい 20m を 4 組やるのがやっとという非常に限られた中でのアップになります。このような状況下では全員でのアップは到底できないため、ほとんどのチームが個人でのアップをしているようです。従って、選手は日頃からどのようにどの程度のアップをした時が最もパフォーマンスが上がるのかは意識していないといけなそうと思われます。グラウンドに入った後は、ファールゾーンの人芝部分でのみ 5 分程度のキャッチボールが許されていますが、このあとすぐにシートノックが始まるので、遠投をする時間も場所もありません。このため、投手は遠投無しで肩をつくれるようにしておかなければならないとの助言もいただきました。

試合が始まると、加盟校連絡会や大会時によく言われるように攻守交替、特に捕手、先頭打者、次打者の準備に関しては少しでも遅くなると球審から声かけられスピーディーな試合運営が行われていました。

試合終了後には、両チームがそれぞれ 1 室に入り、クーリングダウンが行われていました。投手には各 1 名の、野手には全体に数名の理学療法士の方がついて一緒に声を出しながら行われていま

した。ベンチ内には、水とスポーツドリンクの2種類が設置されているとの話も聞いていたもので、40℃を超える中で2時間以上にわたり熱戦を繰り広げることもある厳しい環境の中で、随所に選手へのケアも大切にされた大会運営が見られました。

5. おわりに

選手が最もプレーしやすいよう土のブレンドから芝の状態まで徹底して管理されているグラウンド、そのグラウンドを包み込むようにスタンドからは一挙手一投足に歓声が沸き起こり、アルプススタンドでは出場校の生徒・保護者をはじめOB・OG、関係者、そしてその地域にゆかりのある方まで数多くの方が驚くほど一体化してただひたすらに勝利を願って声を張り上げて応援し、バックネット裏のドリームシートでは甲子園を夢見る小学生が熱いまなざしをおくり、球場内だけではなく全国中継されているテレビを通じて日本中の視線が注がれています。さらには、勝敗が決し試合終了のサイレンが鳴りやんでもなお、その歓声は鳴りやむことがなく、試合内容によっては勝者よりもむしろ敗者へ向けられたものの方が大きいのではないだろうかと思わせるような、勝者の栄誉と敗者の健闘を称えた惜しみない拍手がおくられていました。

今回、幸運にも当研修に参加させていただき、甲子園出場校の技術の高さやチームの完成度、選手の体格など数多くの点でレベルの高さに驚かされ、自分の未熟さに改めて気づかされました。しかし、当研修によって私の中に大きく残ったものは、「やっぱり、甲子園っていいところなんだなあ」ということです。これだけの大声援のなかで、何十万何百万という人の注目を浴びて、野球ができるということは指導者にとっても選手にとっても大変貴重で、それでいて非常に幸せな経験であり、大きく成長できる舞台であろうと思います。このような素晴らしい舞台で野球をやるために、長野県の高校野球が益々発展するように、今後も日々勉強し精進していこうと決意いたしました。

今回の研修に際しまして、お忙しい中にも関わらず球場を案内していただきました小林善一先生、3日間引率として同行し様々なお話をいただきました巢山先生、山岡先生をはじめ、このような貴重な機会をいただきました南信地区の先生方、そして長野県の高校野球関係者の皆様に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



平成 29 年度甲子園指導者研修報告

蘇南高等学校 大野田尚規

1. 始めに

8月10日・11日・12日の3日間、甲子園指導者研修に参加させて頂きました。貴重な研修の機会を頂いたこと、心より感謝申し上げます。普段練習に励むグラウンドの中だけでは得られない、野球観・指導観の変化を経験することができました。

私が監督を務めさせて頂いている蘇南高校野球部は、現在選手8名、女子マネージャー1名（8月20日現在）で活動しております。そのうち、小学校・中学校と野球を経験した生徒は3名で、他5名の選手の中には、高校まで野球のルールをほとんど知らなかった生徒もいます。率直に申し上げて、現状の本校野球部にとって「甲子園出場」は夢物語の域を出ません。そうした実状を踏まえ、今回の研修には、「甲子園に行くためには何が必要なのか」という視点よりも、「甲子園から、本校のチーム・選手のレベルアップの方法を探る」という視点に重きを置き、臨ませて頂きました。その中で発見・再認識した内容を、つたない文章ではありますが、2つの観点到りご報告させて頂きます。

2. 研修報告

(1) 「スケール」を向上させることの必要性について

まず第一に、投球・打球の速さ、飛距離、足の速さなど、甲子園球児たちのプレー一つの「スケール」の大きさに圧倒されました。本校の生徒はもちろんですが、練習試合や地方大会で見かける選手の「スケール」とは、一線を画することを改めて認識しました。一般的に、そうした強豪校の選手が持つ群を抜いたプレーの「スケール」は、天性的なもの、努力では得難いものとして捉えられているように思います。そして、そうした相手に食らいつこうとする際には、同じ土俵に立つのではなく、戦術的な策を用いて戦うことになるのかと思います。

野球が、運などの不確定要素が多分に含まれているスポーツであることを考えると、両チームのプレーの「スケール」に差があったとしても、戦い方次第で善戦をすることは可能かもしれません。しかしながら、様々な策を講じたとしても、土台となるプレーの「スケール」が相手と同等・あるいはそれに近いレベルに到達していない限り、勝利を得るのはやはり難しいのではないのでしょうか。これは、一般公立校が甲子園を目指す場合だけではなく、どんな試合にも当てはまる、野球というスポーツの「勝負の土台」であると思います。

こうした考えに基づくと、練習の第一目標は「スケールアップ」に置くべきであると考えられます。ここで、私が考える「スケールアップ」の定義をしたいと思います。

< 「スケールアップ」の定義 >

①自分たちのプレーの「スケール」を向上させる

→ 各プレーに関して、「より速く」「より大きく」「より遠くに」を目指す。

例) 球速をより速くする、より速い打球を飛ばす、変化球の曲がり方をより大きくする、より長い距離を投げられるようにする、など。

②より大きな「スケール」を持つチーム・選手に対応できるようにする

例) より速いボールを打ち返せるようになる、より速い打球をさばけるようになる、など。

また、どの程度の「スケール」を求めるかはチームが目指す目標に応じて異なるので、「スケールアップ」を目指す際に必要な点は、以下の2点になるかと思います。

＜「スケールアップ」のために必要なこと＞

① 自分たちが目指す「スケールアップ」の具体化

例) どの程度の球速を投げられるようにするのか、どの程度の球速の投球・打球に対応できるようにするのか、など

②「スケールアップ」を実現する練習方法の具体化

私は、昨年度（平成28年度）蘇南高校に赴任してから、「自校の選手達の運動能力は高くない。その運動能力でも戦える方法を見つけよう。」という思いで、指導にあたって参りました。この夏（平成29年度）の選手権大会でも、「対戦相手の球速は速い。限られた選手しか打てる見込みはないので、それ以外の選手はバントの構えで待球作戦を取ろう。」という方針でゲームに臨みました。ゲームの内容を振り返ると、相手投手のコントロールが良く、ストライクを献上しているだけになってしまい、惨敗を喫しました。

客観的に見て、そのピッチャーの球を、自校の選手数人しか打ち返せなかったであろうことは、間違いではないと思います。ただ、今思い返すと、私が赴任した当初から「スケールアップ」に目を向けて指導を重ねていれば、そうした消極的な戦術をとる必要が無かったのかもしれない。もちろん、待球作戦の具体的な内容について反省する点も多々ありますが、「当日の作戦」以前の「指導方針」に敗戦の理由があったように思います。

そうした反省を活かし、現在、蘇南高校野球部では、「スケールアップ」を目指した練習を取りいれています。もちろん、上述した『「スケールアップ」を実現する練習方法』はすんなりと思いつく訳もなく、悪戦苦闘の最中です。ただ、長期的な目線を持って、試行錯誤する姿勢が重要であることを心に留め、日々指導に励んで行きたいと思っています。

2. 「甲子園」を活用したモチベーション作り

上述したように、本校の野球部では、高校から野球を始める選手も少なくありません。また、経験者であっても、高校野球への意欲が高いことは稀です。そのため、選手たちのモチベーションを向上させるためには、「高校野球の魅力」を伝える方法を確立させる必要があ

ります。今回の研修を通して、「甲子園で試合を観戦すること」がその方法の一つになるのではないかと感じました。

他の高校スポーツを見渡しても、高校野球ほどメディアに大きく取り上げられるスポーツはありません。高校野球が日本の「一大行事」となっている証拠だと思います。野球を高校から始めた本校の選手たちも、高校野球の「特別さ」は、自然と感じ取っているようです。夏の甲子園に足を踏み入れ、一つのプレーで大観衆が興奮・熱狂する様子を目の当たりにすれば、その「特別さ」をさらに色濃く「体感」することができると思います。私自身、高校1年生の時に初めて甲子園を訪れた時の興奮は、今でも鮮明に覚えています。

私は、野球というスポーツの醍醐味は「プレーの断続性」にあると考えています。野球は、サッカーやバスケットボールと違い、投球間にプレーが中断される時間が生まれます。その中断の合間に選手たちは戦術的・心理的準備を行い、観衆は次のプレーへの期待を膨らませます。それによって、ボールが再度動き始めた時の緊張感・注目度が際立たされ、「ナイスプレー」に対する選手自身の昂揚感はとても大きなものとなります。観衆の声援は、その高揚感を限りなく大きなものへと後押ししてくれるものだと思います。今回、甲子園で活躍する選手たちを見ている中で、「羨ましい」「カッコいい」「やっぱり高校野球はいい」という感覚を改めて持ちました。これは、甲子園の大観衆が作り出す空気感が、上述したような野球の魅力を最大限に際立させるからだだと思います。

本校の生徒もそうですが、当然のことながら、野球未経験者は球場で野球を観戦した経験がほとんどありません。解説をせずとも、自然と野球・高校野球の魅力「体感」できる甲子園へ連れて行くことが、彼らの高校野球への意欲を駆り立てるきっかけになると思います。

3. 終わりに

現在蘇南高校野球部は、甲子園とはほど遠い、「1勝」を目指して日々練習に励んでいます。選手達は、後ろ向きな気持ちでこの目標を設定している訳ではなく、自分たちの立ち位置を変えるため、日々前向きに努力を重ねています。達成の可能性を考えても、彼らが最大限の努力を続けて、やっと現実味を帯びる目標設定になっていると思います。ですから、私はこの目標自体に何も不満はありませんし、目標達成に向け全力で彼らに力を貸したいと思っています。

ただ、高校野球の指導者として、いつか本校でも「どうせ高校野球をやるなら、甲子園を目指したい」と思う選手が生まれる可能性を諦めることはできません。選手たちの頑張りの積み重ねが、そうした環境を作り上げる土台となることを信じて、指導にあたって行きたいと思っています。

最後に、今回このような貴重な研修の機会を頂いたこと、改めて感謝申し上げます。研修で学んだ内容を今後へ活かし、自校の選手達の成長、長野県の高校野球の発展のために今後とも尽力させていただきます。